

第二十二回
芦屋能・狂言鑑賞の会

番組

一調 花月 Kagetsu 謡 長山桂三 大鼓 山本寿弥

狂言 濯ぎ川 Susugigawa 夫 善竹隆平 妻 善竹忠亮
作 飯沢 匡 演出 武智鉄二 姑 善竹隆司

芦屋市長 挨拶 高島峻輔

逆髪 親世喜正

能 蝉丸 親世鏡之丞

Semimaru 清貫 福玉知登

替之型 輿舁 喜多雅人

琵琶之会釈 輿舁 廣谷和夫

博雅三位 善竹隆司

中森健之介

後見 親世淳夫

鶴澤 光

令和五年十一月十七日(金) 午後五時開演

後見 上吉川徹

大鼓 安福光雄
小鼓 曾和鼓堂

笛 野口 亮

金子仁智翔 林本 大
上田顕崇 小島英明
地謡 笠田祐樹 長山耕三
上野雄介 武田宗典

(終演七時四十分予定)

■一調 花月 かげつ
幼い我が子が行方知れずになったことで、出家して諸国を巡る父。京都清水寺で出会った、小歌や弓矢の芸で人気を集め、寺の縁起を語る少年「花月」。こそが我が子であった。芸尽くしと一体となった親子再会を描く能の佳作です。今回は父との再会にあたって、七歳で天狗に攫われてから今までに廻ってきた日本全国の山々の名を、花月が芸収めの芸として謡い上げる場面を上演します。「一調」という、謡と大鼓が一對一で演奏する形式で、謡の内容は勿論、節や緩急の面白さ、通常とは異なる鼓の手など、互いに技巧を尽くしたものとなります。東京の中堅シテ方・長山桂三師の力強い謡をお楽しみ下さい。

■狂言 濯ぎ川 すずぎがわ
毎日、嫁と姑に少しの暇も与えられずに使われる婿養子の男。今日も言いつけ通り川で洗濯していると、それが終わらぬ内に、次々に用事を言いつけられる。あまりの多さに困り果て、男はしなくてはならない用事を紙に書き記し、書いてないことはしなくても良いと約束を取り付けて、ささやかな反抗を試みるが――。

昭和二十八年、フランスの古典喜劇を元に飯沢匡が台本執筆、武智鉄二の演出で初演された新作狂言で、現在に至るまで広く上演されている作品です。
古典にもある女性像と新作らしい工夫の両立した作品で、狂言の夫婦や家族の姿を、関西を本拠とする大蔵流善竹家が描き出します。

■能 蝉丸 せみまる
延喜帝(醍醐天皇)の第四の御子・蝉丸は生まれつき目が見えない。あるとき廷臣の清貫(ワキ)は、蝉丸を都と近江の境の逢坂山に捨てよ、という勅命の下、蝉丸を逢坂山に連れ出す。嘆く清貫に、蝉丸は後世を思う帝の歎慮だと諭す。清貫はその場で蝉丸の髪を剃って出家させ、養・笠・杖を渡して別れる。蝉丸は琵琶を胸に抱き、涙のうちに伏しまろぶ。

蝉丸の様子を見に来た博雅の三位(アイ)は、あまりに痛々しいことから、雨露をしのげるよう藁屋をしっかりとる。

一方、延喜帝の第三の御子・逆髪は、皇女として生まれながらも逆さまに生い立つ髪を持つたがため、物狂いとなり辺地をさまよっていた。都を出て逢坂山に着いた逆髪は、藁屋より漏れ聞こえる琵琶の音を耳に止め、弟の蝉丸がいるのに気づき、声をかける。二人は互いに手と手を取り、境遇を語り合う。しかし、やがて立ち去る姉の後ろ姿を、蝉丸は見えぬ目で見送るのだった。

『百人一首』で知られる「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふ坂の関」の蝉丸と、その姉・逆髪の物語です。「逢ふ」という名を持つ逢坂山で姉弟は再会し、そして別れます。「逆髪」という名前も、元々は逢坂の「坂の神」の意味ではないかと言われています。

仏教の哲理「会者定離(会う者は離れる定め)」を背景に細かく作り込まれた能で、一つ一つの場面が現代人の心にも深く迫ります。ハンディを背負う二人の貴い姉弟の素直な心が、切なさ・やるせなさと共に、愛おしさをも感じさせる作品となっています。東京を中心に幅広く活躍されている親世鏡之丞家の九世親世鏡之丞師と、矢来親世家の親世喜正師をお招きし、蝉丸と逆髪を演じていただきます。鏡之丞師の力強さ・繊細さ、喜正師の華やかさの共演をお楽しみください。

当日、ご自身のスマートフォンとイヤホンで解説音声を聞くことができます。サービスを用意しております。私・朝原がご案内させていただきますので、初心者の方はぜひご利用くださいませ。

(朝原広基 能楽研究者)